

インドネシアの現代アート
ーコンテンポラリーダンスの現状ー
Indonesian Contemporary Art:
Current Situation of Contemporary Dance Scene

福岡まどか (大阪大学)
FUKUOKA Madoka (Osaka University)

この発表では、コンテンポラリーダンスを事例にインドネシア現代アートシーンの現状を考える。ダンスの分野で「コンテンポラリー kontemporer」という概念は1950年代後半に欧米から入ってきたとされる(Supriyanto et al. 2014)が、定着したのは芸術教育機関でこの概念が用いられるようになった1980年代後半から1990年代と考えられる。当時のコンテンポラリーは欧米のダンスの手法を用いてインドネシアの伝統的要素を提示するものを指しており、欧米におけるコンテンポラリーダンスが伝統からの解放を目指したことは対照的であった。この基本的考え方は現在まで引き継がれているとともに、近年では「インドネシアの伝統的要素」が当該アーティストの出身地の文化的要素に限らず広大なインドネシアを構成する多様な地域の文化的要素として位置づけられている。アーティストたちは地域の多様性をアピールしつつ国際的アートシーンに参加するとともに、その地域の文化的状況にも積極的に関与する。

この状況の背景としてはアーティストの文化的経験が変化しつつあることが挙げられる。特に伝統的な家系出身であるが海外で教育を受けた経験などから自らの伝統に再帰的に向き合う「ポスト伝統的」アーティスト[Cohen 2016]の活躍が顕著であることは、コンテンポラリーダンスを含むこんにちの文化的活動の特徴である。

中部ジャワの文化伝統を究めアメリカ留学を経て帰国後に活躍するダンサー、エコ・スプリヤントの芸術活動に焦点を当てる。北マルクを舞台とする2014年以降の一連の作品、東ティモールを舞台とする新作(2019)の検討を通して、地域の現状に関与し創作活動を行いつつ国際的アートシーンにも参入していく活動について検討してみたい。

【文献】

1. Cohen M. I. 2016 Global Modernities and Post-Traditional Shadow Puppetry in Contemporary Southeast Asia. *Third Text* 30 (3-4): 188-206.
<https://doi.org/10.1080/09528822.2017.1305728>
2. Supriyanto E., Haryono T., Soedarsono R. M. and S. Mulgiyanto 2014 Empat Koreografer Tari Kontemporer Indonesia Periode 1990-2008. *Panggung* 24(4): 335-350